

## 身のまわりでできるチャリティー活動

さいたま市立大谷口中学校 2年 豊田 朱莉

私は中学に上った冬に、ヘアドネーションをした。ヘアドネーションとは、がんなどの病気や薬の副作用で髪が抜けてしまった人に、人毛ウィッグを届けるものである。

私は昔から、クラシックバレエをやっており、発表会などで髪をシニヨン(お団子)にしなくてはならないため、バレエをやっていた時はずっとロングヘアだった。

中学に上がり、勉強や部活とバレエの両立が難しくなり、バレエをやめてしまった。昔からショートカットにすることにあこがれていた。その時、母からヘアドネーションをすすめられた。私は軽い気持ちでヘアドネーションを承諾した。

数日がたち、ヘアドネーションを受け付けている美容院に行った。

最初に専用の紙にヘアカラー・パーマを行ったことはないかなどをチェックしていった。チェックをおえると、いつも髪を切る時のように着々と準備されていった。

髪をとかし、何束かに結んでいった。私は他の人よりも髪が多く、普通は四束ほどに分けるところを、私は五、六束に結んだ。美容師さんがハサミを構えて、次々と束になった髪を切っていった。

ショートカットになれる喜びと、ハサミの音で、心臓がとてもドキドキした。

切った束は丁寧に包装され、さっき記入した用紙と一緒に箱へとつめられた。

ヘアドネーションをしてから数十日程たって、葉書が届いた。それには、『ありがとう』や『謝謝』、『THANKYOU』などのその他三十ヶ国以上のありがとうの文字が葉書いっぱい印刷されていた。それに加えて、ドネーションチャリティー団体のマークもあった。マークは、人から人へ髪の手のような、虹のような架け橋でつながっていた。それを見て、私は世界の誰かを助けたような気持ちになった。

それから私は、学校の授業や、課題などで世界的な問題を調べる機会が増えた。先生や、友達の調べた世界的な問題を聞く度に、ドネーションのように、身のまわりで解決できるものも多いと知れた。

一人の協力で、誰かを助けることができるのは、世界から見たら、蟻のように小さな事だけど、それが沢山のの人に広がって、沢山の人が救われるのは幸せな事だと思った。

これからも私は身のまわりでできる事に注目し、協力していきたいと思った。